

## (5) Marlton School, Los Angeles (マールトン学校)

### 1) 概要

マールトン学校は、ロサンゼルス郡に建てられた公立学校で、聴覚障害児対象の教育プログラム (K-12) と、聴覚障害児の兄弟のための一般教育プログラム (K-5) が一緒になっている。現在、それぞれのプログラムに 225 名、120 名の児童生徒が在籍している。聴覚障害児対象の教育プログラムでは、2000 年からバイリンガル教育に取り組んでおり、ギャローデット大学における ASL/英語のバイリンガル教育研究センター (CAEBER) との共同で実践的検討を進めている。

マールトン学校を視察した理由は、前述の北カリフォルニアにある州立フリーモント聾学校に対して、公立学校の場合にはどのような移行支援を行っているのか関心があったためである。ただ後述するロサンゼルスろうコミュニティセンターの視察を同じ日程に行うことになっており視察の時間が限られていたため、IEP コーディネーターのインタビューを中心に行った。

### 2) マールトン学校における移行支援について

IEP コーディネーターの Janet Mcgabe 氏は、聴者であり、20 年ほど IEP コーディネーターとして様々な学校で勤務し、マールトン学校では赴任 4 年目になる。もちろん ASL も堪能である。Janet 氏に、マールトン学校の移行支援についてインタビューした。

マールトン学校の地区は特別学区であり、教育対象年齢を 3 歳～22 歳までとし、高校 3 年以後も不足している学力の補強、大学や職場への移行支援の保障ができるように取り組んでいるとのことである。また、この地域では、英語を第一言語としない、または英語力が充分でないメキシコ系アメリカ人を筆頭に、アフリカ系アメリカ人、アジア系アメリカ人が多く居住していることから、スペイン語などその国独自の言語を補足したり、個々の英語力に合わせてわかりやすい英語に翻訳したものを提供するなど、最低限の英語力を身につけられるような言語環境に多く接することができる必要がある。

聴覚障害対象教育プログラムの高等部では、高校 1 年から個々の能力や卒後の進路に応じてグループを編成して指導する体制をとっている。これを「グルーピング・プロセス」と言う。現在は、①大学進学を希望しているディプロマグループ (2 グループ)、②小学 1 年程度の低学力を有するグループ (1 グループ)、③ろう重複障害のグループ (1 グループ) で構成されている。なお、ディプロマグループの中でカリフォルニア高校卒業認定試験 (California High School Exit Exam, CAHSEE) に合格できなかった学生でも、マールト



図 18 マールトン学校入口近くにある壁画



図 19 校舎の廊下。左側に一般教育プログラムの教室、右側に聴覚障害児対象教育プログラムの教室が並んでいる。

ン学校で所定のカリキュラムを終了後、職業学校（夜間部のクラスもある）やコミュニティ・カレッジへ進み、英語の読み書き、数学等を学びながら、CAHSEEに備えるケースもある。その後、4年制大学へ編入学する学生もいる。

ディプロマグループに対する移行支援の流れは、フリーモント聾学校のキャリアセンターで行われていることと類似していた。まず高校1年の時に、IEPコーディネーターが生徒本人、担当教員と話し合う。次に、キャリアカウンセラーとVRカウンセラーも加わって、生徒本人、教員、キャリアカウンセラー、VRカウンセラーの4名によるチーム編成で、今後のプランについて相談し、高校2,3年から準備を始められるように進めていく。保護者の同席もお願いしているが、親の意識の低さから同席することは少ないという。また、週に1,2回、トランジション地域局（District Office of Transition）の専門家が学校訪問して、生徒の移行スキルについて専門的なアセスメントを行い、これを移行プランに反映させて前述のチーム内で検討する。

### 3) 移行支援に関わる課題について－親への啓発－

Janet氏は、親も我が子の能力と可能性をきちんと捉えて、一緒に現実的なプランを考えていくことの重要性を何度も訴えていた。

マールトン学校では、年に1回、「キャリアフェア」を主催し、ロサンゼルスろうコミュニティセンターのろうスタッフ（後述するPaul Stussey氏も担当している）や卒業生に親対象の講演や説明会の講師を依頼したり、親との個別相談コーナーを設けて「家族内のコミュニケーション保障の大切さ」「将来の仕事に向けて家族とともに経験してもらいたいことは何か」などを説明してもらっている。他に、聴覚障害のある卒業生が働いている職場を親たちが見学するツアーも行っている。これらは高校生になってからではなく学校に入学した時からできる限り多く参加してもらって、早期に我が子の現在と将来を考えながら家族内の方針やコミュニケーションのあり方を考えていけるようにしたい。また、あまり積極的でない親をどのように巻き込んでいくかも以前から続く課題であるが、今後も辛抱強く啓発活動を続けていくしかないとのことである。